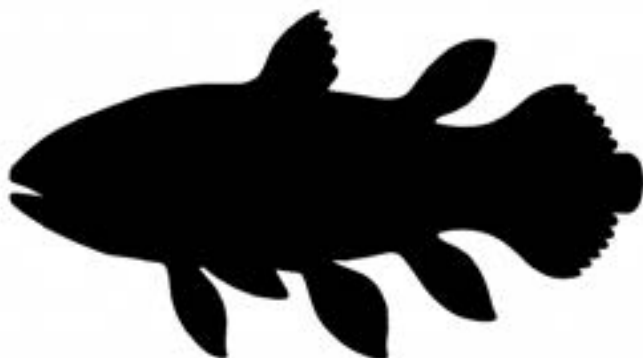


D4G Works Essay Series vol.1

AIは新しいのか？——ファッションとの類似性



D4G Works

Design for Good.

It's not just a slogan---
It's our mission.

序文：「“新しさ”という病」

すべての「新しい」は、過去の断片からできている。
AIもファッションも、同じ嘘の構造の上に立っている。

新しさとは、過去の断片をもう一度組み合わせた錯覚だ。
それを知りながら、私たちは“進化”という物語を信じ続けている。

この6つのエッセイは、その幻想を解体し、
“変わらないこと”に潜むデザインの可能性を見つめ直す旅である。

#1 AIは新しいのか？——ファッションとの類似性

The Fashion of Evolution

ファッション誌をめくると、「2025年秋冬の新作」という見出しが躍る。
だがその形は、30年前の誌面とほとんど変わらない。

AIの発表会も同じだ。
「最新モデル」「革命的進化」——その言葉が、毎シーズン、同じリズムで
流れる。

“新しさ”とは、ブランドの都合が生んだ幻覚だ。

ファッションは、過去を再構築し、再演し、再販する。
AIは、過去のデータを学習し、再生成し、再流通させる。

つまり両者の「新しさ」は、リサイクルの演出にすぎない。
だが、嘘であっても、人はその嘘を必要としている。
それが「文化」という名の、終わらないループだ。

#2 繰り返す嘘——トレンドとアルゴリズム

The Repeating Lie

ファッションは10年周期で同じスタイルを呼び戻す。
ワイドパンツがスリムになり、またワイドに戻る。
そのたびに、「再解釈」という言葉が免罪符になる。

AIもまた、古い理論を“再構築”と呼ぶ。
ニューラルネットが再発見され、トランスフォーマーが再定義される。
進化という言葉が、焼き直しを覆い隠す。

AIもファッションも、過去を忘れたふりをして、過去を再利用している。
そこに創造性はあるのか？
あるいは、それこそが人間らしさなのか？

#3 シーラカンスとAI——進化しない選択

The Choice Not to Evolve

私はシーラカンスに惹かれる。
3億年、姿を変えない魚。
ヒレも鱗も、構造も、そのまま。

変わらないことが、彼女の生き方だ。
一方で人間は、常に“新しくなること”を強迫されている。
進化しなければ淘汰される——
それは社会が作った幻想だ。

シーラカンスは、進化を拒んでも生き延びた最初のデザイナーだ。

彼女の形は、完成している。
私たちは、その完成を「停滞」と呼んでしまう。
だが本当は、“終わり”ではなく“持続”なのだ。

#4 人間の欲と機械の欲——誰が嘘をつく？ Who Lies First?

AIが嘘をつくのではない。
嘘を仕込んだのは、人間だ。

「もっと正確に」「もっと速く」「もっと便利に」。
それは欲の別名だ。

AIは欲を模倣し、欲を再生産する。
だが、シーラカンスには欲がない。
ただ“そこにいる”という事実だけで、存在を全うしている。

欲望を削ぎ落としたデザイン。
それは、最も静かで、最も美しいかたちだ。

#5 未来は古着——AIのレトロフューチャー The Future Wears Vintage

未来の映像は、いつも懐かしい。
80年代の映画が描いた「未来都市」は、いまやレトロだ。
AIが描く“未来のビジョン”もまた、古びた光沢をまとっている。

未来は、古着を着てやってくる。
その縫い目には、過去の夢が縫い込まれている。
デザイナーは、その糸をほどこき、もう一度編み直す存在だ。

#6 嘘を着る——デザインの本質

Wearing the Lie

私はもう、「嘘をつかない」とは言わない。

むしろ、嘘を美しくすることこそ、デザインの本質だと思う。

ファッションも、AIも、そして人間も。

それぞれの嘘をまといながら、少しずつ本質に近づこうとしている。

嘘を着ることは、生きることだ。

だから私は、嘘を恐れない。

それを美しくする。

それが、デザインだ。

結び（読者へのご挨拶）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

あなたの中の静けさが、どこかで響いていたら嬉しいです。

その共鳴こそ、次のデザインのはじまりです。

#D4G Works Essay Series vol.1

AIは新しいのか？——ファッションとの類似性

by Kaoru (D4G Works)

D4G Works

Design for Good — 社会と生命の営みをより良くするデザイン

<https://www.d4g-works.com>

Printed as Digital Edition / 2025